

## チョコレート・クランチ — 時岡隆さんのこと

大垣俊一

2001年10月に、元京大瀬戸臨海実験所長、京大名誉教授の時岡隆さんが亡くなったと聞いた。

最初に時岡さんと話をしたのは、大学院のD2の頃であったと記憶している。時岡さんが1963年に始めたウニの調査が、自らの京大退官とともに中断したことを惜しみ、継続する研究者を探していたらしい。その話が私に回ってきて、取り次いだもう一人の大学院生と共に御自宅を訪問したのである。家の中はネコだらけであった。相手は初対面の前実験所長にして、頑固一徹と前評判の分類学の権威。多少構えて話している私のひざの上に、ネコがかわるがわる上がってきては爪を立てる。話の内容は、調査の継続方法である。同僚院生は、今のコドラートは大潮低潮線ぎりぎりですりずりやりにくいから、高いところに移し、数年は両方重ねてやったらどうかと提案する。私はそれはまずいと思ったが、時岡さんにはこにこしながら、あなたたちのやりやすい形で結構、とにかく継続してほしい、と言う。意外に柔軟、という印象を受けた。それ以降、私は「島島一世紀調査」の復活を期し、調査の枠組みや過去の生物相について話を聞くためにしばしば時岡さんのもとを訪れた。行くと必ず、インスタントコーヒーとチョコレートが出てきた。チョコは赤い小袋に入ったクランチ風である。私は甘い物はあまり好まないので手をつけずにいると、結構しつこく勧める。それで結局一つは食べざるを得ないのであった。初回は柔軟な印象を与えた時岡さんだったが、会うにつれ次第にその「本領」を発揮してきた。やり合ったのは、そのころのことである。

この一件には伏線があって、島島で過去、学生実習でウニの分布調査をしたが、よい資料だから publish してほしいと、時岡さんから依頼を受けた。当時の調査者に連絡をとり、書くのは私だが彼らの名前で出す、という込み入った内容である。私は著者がどうこうよりも結果が公表されることが第一と考え、これに同意して何とか発表にこぎつけた。このあと、私はさらに、1969年に時岡さんが記録した島島生物相のデータを、84年の私達の調査結果と比較した論文を準備し、時岡さんに共著者になってくれるようにと申し入れた。しかし時岡さんは、データは自由に使ってくれてよいが、私は共著者にはならない、と拒否する。なぜかと聞くと、共著の理想はうんぬんと話すのだが、納得できない。「そもそもウニの論文の時、時岡さんは調査者が著者であらねばならないと言い、私はそれに同意して骨を折った。それなのにこの件で自分が著者にならないとは、矛盾しているではないですか」と突っ込むと、「彼らが共著者になるならないは、彼らの判断であり、私には私の判断があるから矛盾しない」と突っぱねる。私はこの論法はおかしいのではないかと思ったが、相手は自信満々で絶対に譲らない。首をひねっているうちに押し切られてしまった。しかしチョンボもある。話題を変えて、島島買取りの経緯を聞きながら「買取り成立は1968年12月…」と私が言うと、「いや、70年」と遮

る。「あれは私の母が亡くなったときだから、まちがいない」と、今度も自信満々である。そこで私が、はいこれが当時の新聞記事。これは実験所の文書。これなんか時岡さんが自分で書いた…、と目の前にさらさらっと 68 年買取りの資料を並べると、時岡さんはだんだんうつむきかげんになり、「そうか、こんな大事なことを…」と、トーンも落ちてきた。「ねえ、こんな大事なことを…」と、私は身を乗り出し、「大丈夫ですかあ、ほっほっほー」とまでは言わなかったが、頑固じいさんから一本取ったことに満足して、意気揚々と引き上げたのであった。

この時の私に対してだけでなく、時岡さんは批判を受けると、ニコニコとして余裕を持って応じ、しかも自分の意見を譲らなかった。元気の良い院生が好きだったのだろう。年を取ると、年下の者の批判を冷静に受け止められず感情的になり、批判分子を放逐して束の間心の平安を得ようとする、などということにもなりがちだが、この時岡さんの懐の深さには学ぶべきものがある、と私は常々思っていた。

私が白浜を出て、あちこち放浪の後、再び紀南に戻ったのが約 10 年前。落ち着いてしばらくしてあいさつに行くと、仕事は何をしているのかと聞く。答えると、「塾ばやりだな、ふん」とつぶやき、私が黙ったのを見て、「まあ、いいか…」と話を続けた。しかしまずかったと思ったのだろう。帰るとすぐに電話がかかってくる。明治維新当時の私塾のことなどを引き合いに出し、塾でこそ人材は育つ、がんばりなさい。という励ましであった。私は自分のやっていることを省みていささかとまどうところもあったが、気持ちは伝わった。思いやりのある人であった。以後も訪れるたびに、まず「生活はどう」と聞かれた。「特に困っていません」と答えると、「困ってない、よし」と応ずる。それから用件の話になった。

時岡さんの、過激と言ってもよい型破りな考え方、行動にはしばしば驚かされた。自然保護への強い思いと、埋立て反対運動や島島の買取り。禁漁区でウニを取っているのを見て詰め寄り、バケツのウニを海にぶちまけたこともあったという。そのため多くの敵を作ったと批判する人もあるが、それは時岡さんと批判者の成したことを、歴史が判断する問題であろう。しかし反発を招いたばかりではない。地元の漁師から聞いたことがある。漁港に時おり、時岡さんが現れる。網を繕う漁師のそばに立ち止まり、じっと見ているので、なんだろうと緊張していると、じきにしゃがみこみ、「君、それはね…」と、講釈が始まる。「あのじいさんにつかまったら終わりなんや」と苦笑する漁師の表情には、しかし、立場の違いを越えてじかに接してこようとする老研究者への、親しみの気持ちがにじんんでいた。「連帯を求めて孤立を恐れず」とは、かつての全共闘のスローガンである。自らを「保守反動」と評した時岡さんだが、この人こそ、このスローガンを地で行った人ではなかったかと思う。

最後に会ったのは、亡くなる 1 年半ほど前。電話すると、もう目も見えにくく、耳も遠いということだったが、「がんばっている人に会うのは気持ちがいいから」と面会を承諾された。この時は、番所崎の長期変動調査の論文別刷りを謹呈するのが目的だったが、時岡さんは、長期にわたる継続調査を評価しつつ、論文のスタイルには批判的であった。データを Results の中にもっと豊富に示し、個々の種の動向に言及できるようにすべきであると言う。重要な指摘だと思った。時岡さんのかつての島島の調査記録を見る

と、岩礁の詳細なスケッチの上に、どこに何がどれだけいたかということをつぶしりと書き込んである。私はこれを publish する時、区画ごとの各種の存、不存に整理し直したが、その際、データの豊かさを切り縮めているというしろめたさをぬぐえなかった。そのスケッチを見るとどこの場所かはっきり分かるので、現状と比較して、ここがこうだったのかと驚嘆することもしばしばなのである。しかし今は、Results の中に、生データを丸ごと提示するようなやり方は採用されない。末尾の Appendix さえほとんど見かけなくなった。制限ページなどというせちがらい制度が定着し、それも 10 ページ、8 ページ、6 ページなどと値切られつつある。良い悪いは別として、これは既に動かしがたい流れとなった。時岡さんのデータを数値化して簡略化した私自身、ランダムコードラートと統計的推定というトレンドに合わず、全部見るのは古いとして、隅に追いやられつつあるのである。

このときには、話がかつて島島に立っていた実験所の看板のことに及び、私が「学生実習で初めて上陸して一世紀調査の看板を見たとき、すごいことをやっていると思って強い印象を受けた。あれが私の、長期変動調査の原点です」と言うと、時岡さんはハンカチで目頭を押さえていた。島島買取りの時の苦労が少しでも報われたと、思って頂けたらどうか。帰り際、財布をさぐり、千円を取り出して私に渡そうとする。驚いて固辞したが、言い出すと引かない人である。その千円札に込められた思いを、私は受け取ることにした。

時岡さんという思い出す、一枚の写真がある。島島の南岸フラットに身をかがめ、プレートを手にも、すでに 50 才を越えた時岡さんが一人調査する姿。島の実験地化直後に、現況調査が始まったことを報ずる当時の新聞記事である。鳴り物入りで始まった一世紀調査であったが、実際には、島の買取りは「時岡さんが勝手にやったこと」という冷ややかな評価も周囲にあり、調査はしばしば単独で行われたという。

かつて、時岡さんとこんな会話を交わしたことがある。「結局、最後は一人だと思っていますから。」「そうだ。私もそう思ってやってきた。」これからもフィールドでの調査中、手を止めて心につぶやくことがあるだろう。…「時岡さん、私もやってますよ。」